研究論文

寝殿造住宅庭園における眺望行為

本 中 真*

On the Views from The Shinden-zukuri Garden

Makoto MOTONAKA

摘要：この小論では、9～13世紀の寝殿造住宅庭園における眺望行為の特性を、建物、庭園、自然の3カテゴリーの個別の性格と三者の関係性を問う中で明らかにした。総じてこの時期におけるカテゴリーは未分化であり、その関係性もきわめて即自的である。それ故、動線上において風景の特殊化が欠如し、園外景観が人事の背景の機能しかもたないという前時代の眺望行為の特性を、そのままうけつぐものであるといえる。

序. 研究の方法, 目的

この小論は、9世紀から13世紀にかけて作庭されたいわゆる寝殿造住宅庭園における園外景観の眺望行為の特性について明らかにすることを目的としている。

庭園における眺望行為の形式と、そこに見られる眺望景観の扱われ方の体系的分析手法とは、視点となり得る建物、視点と眺望対象の結節の場として機能する庭園、それに眺望対象となる自然の3つのカテゴリーの個別の形態的、質的性格を把握し、それがどのように3者の関係性として反映しているかを、動線、庭園の使用目的、遮蔽物の素材の観点から考察することである¹⁾。

しかしながら、文献において眺望行為が行われたことを知り得る9～13世紀の住宅庭園の中で、現在にその姿を留めている遺構は皆無であるし、また、発掘調査によって、視点、遮蔽物、眺望対象の関係性を復原し得る事例も今のところ確かめられてはいない。従ってこの時期の住宅庭園における眺望行為の特性分析を、実際の遺構に即して行うことは不可能であり、上記のように数少ない事例を史料操作によって分析する以外に方法はないものと考えてる。

さて、当時の住宅庭園の中で、眺望行為が行われたことを推定し得る数少ない事例として、次の4例を挙げることができる。

1. 臥見亭, 2. 伏見殿, 3. 水無瀬殿, 4. 亀山殿

このうち4については寝殿造住宅庭園の範疇に含め得るものの、後に天龍寺庭園として継承され、中世禅院庭園における眺望行為への移行過程として独自の性格もっており、これに関する分析は別稿にゆずるべきだと考

える。これに対して残る3例はすべてこの時期に限定して存在したことが文献上明らかであり、本論の分析対象として好適であると考ええる。ただこの3例に関しても庭園カテゴリーの性格や、庭園の使われ方と園外景観との関係性を把握するうえでは充分の史料を認め得るが、建物の詳細な配置状況及び構造等については不明な点が多く、建物カテゴリーの性格や、動線と眺望景観との関係性を問ううえでは不十分だといわざるを得ない。

それ故、本研究では、上記の3例が文献上寝殿造の形式をもっていたことを断片的にはあるが推測し得るという事実から、同時代の他の寝殿造で庭園を有する貴顕の第宅（東三條殿）を抽出し、そこに見られる建物内部及び庭園における動線を指標とする分析を行うものとする。

また自然カテゴリーについては、平安京の景観的、経済的状况を概観する中で自然に対する人間の認識度について分析し、美術史料から判断される当時の自然観をその傍証とする。

以上のように、この小論では、10～13世紀の寝殿造住宅庭園における眺望行為の形式と眺望景観の扱われ方の特性を、寝殿造住宅の典型例に見る建物及び動線、眺望行為が存在したと推定し得る事例における庭園及びその使用目的、同時代の都市の状況等から導き出される自然観等の観点から総合的に考察するものである。

1. 建 物

東三條殿は9世紀末から10世紀初頭にかけて摂関家の所領となり、永観2(984)年の焼失後、永延1(987)年に再建され、道長の所領となってからは藤原氏一族の

* 奈良国立文化財研究所

図-1 東三條殿復原平面図³⁾⁴⁾

儀式を行うための邸宅として機能し²⁾、一時里内裏としても使用された。その後は長和2(1013)年の焼亡をはじめ、再建と焼亡をくりかえすが、長久4(1043)年藤原頼道によって再建され、仁安1(1166)年12月に焼亡するまで約120年間存在しつづけた模様である。

このように東三條殿は、平安時代後半を通じて藤原一族の正式な儀式の場や、また時期によっては皇室の里内裏などの政治、文化の舞台として機能した、文字通り平安時代を代表する寝殿造住宅だといえよう。この東三條殿については文献も豊富であり、建物配置の復原プランも作成されている(図-1)³⁾⁴⁾。以下の分析及び考察は、これらの資料に基いて展開するものとする。

さて、この東三條殿でくりひろげられた儀式の中で、建物がどのように使われたかを、“大饗”と“臨時客”とを例に見てみよう。まず“大饗”の場合であるが、“大饗”には二宮大饗、大臣大饗、大将大饗の3種があり、前者が中宮、東宮の二宮が主催するのに対し、後二者は大臣や大将に任官された場合に行う臣下の饗であった。このうち大臣大饗には“任大臣大饗”以外に年頭に行う“正月大饗”があり、摂関家の大臣が私邸に宴席を設け親王や公卿などの尊者を招くのを常としたもので、摂関家最大の儀式であった⁵⁾。この“大臣大饗”に関する儀式次第は『江家次第』巻第2に詳しい。

「一大納言来。

主人着。親王座。遣。掌客使。以。四位。為之。
…(中略)…掌客使申。尊者来坐由。…(中略)…
公卿以下列。立中門外。當。車寄戸。…(中略)…
尊者入。門。當。第一大納言。揖。諸卿以下共揖。
入。自。中門。進。出庭中。…(中略)…
先。是主人降。自。南階。當。座下方。立。(中略)
大臣以下列。立階前。…(中略)…
主客共再拜。
主人與。尊者。相議。…(中略)…
尊者離列。許。太留相議。…(中略)…
主人尊者相並昇。自。南階東端。…(中略)…着座
(以下略)」⁶⁾

主人である大臣家の側から五位以上(上述の引用文では四位)の請客使が、尊者すなわち大納言のもとに使いに出される。上記の文には省略されているが、本来ならばこれに対して尊者の側からは蘇甘栗使が返される。次に尊者が請客使の招へいに応じて大臣家に到着し、中門外にて降車、公卿諸衆の出迎えをうけて南庭まで歩いていく。ここで寝殿南階より降りてきた主人と庭上において主客再拜、三度互いに譲りあった後、両者ともに南階から寝殿へと昇り、宴席の開始となる。

この“大饗”が東三條殿において実際に行われた記録

写真-2 摂関家臨時客（東三條殿東の対）（年中行事絵巻第6巻第1段）

する終結部において、建物内部を経由せずに建物外の庭園の一部（南庭）を経由することである。大臣家大饗の全行程は建物内部だけで完了することではなく、必ず庭園をも含めた形で進行する。すなわち、人間が完全な閉鎖空間へ導かれることはなく、寢殿に到着するまで人間の動線は必ず外部空間に存在し、その途上における視界は常に開かれていることになる。このような視界の開放された外部空間の動線上からは、そこに明確な遮蔽物が存在しない以上、人間の進行方向にかかわらず、視界が庭園景観や、ひいては園外の自然景観へと連続していく可能性は十分にあったと考えられる。

『類聚雑要抄』巻1に図示する「内大臣（忠通）殿母屋大饗寢殿指図」⁹⁾は、永久4(1116)年正月23日に東三條殿において催された“大饗”の模様を示すものであるが(図-2)、西透廊、東中門廊に幌(仮設の幕)が張られ、あたかも南庭へと進む人間の視界を進行方向に向けて一旦隔絶しているように見うけられる。しかし幌の本来の性格は、あくまで仮設の施設として不要な空間を遮蔽することにある。しかも幌門を経て南庭へと至ればそこは開放された空間であり、この時点で人間の視界が庭園景観や園外景観へと連続していくことは可能である。それ故、たとえ幌が張りめぐらされていたとしても、それを視界が進行方向以外に発展していくことを妨げるための遮蔽物としてとらえることには問題があろう。やはり“大饗”に際しては、中門を入れて寢殿に至る動線上における人間の視界は常に開かれていたと考えるべきである。

これに対して“臨時客”を迎える場合はどうであろうか。“大饗”が主人の正式な招へいによって客を招く儀式であるのに対し、“臨時客”とは、これに次いで主人の意向に関係なく客人の方から訪問する場合をいう。

『口言部類』には次のように記す。

「天永四年正月二日乙卯。天晴。参殿下。有拝礼。又有院拝礼。申時内大臣以下参東三條。入従東門。東対南面被儲座也。…(中略)…内府當庭中之橋南被立也。人々過其後。東上北面。…殿上人兩貫首以下皆参列。立其後。…二拝了。…殿下獨昇給。令着座後。内府被昇。…大納言以下。従中門廊方被昇。…(以下略)」¹⁰⁾ 任臣や年頭に際しての正式な儀式である大饗が邸宅内の正殿である寢殿を使用するのにに対し、臨時客の場合は儀式が比較的小規模であるのと、客人の性格上東対が用いられている。従って大饗では西中門から入場するのに対し、臨時客では東中門から入場する¹¹⁾。まず主人と、客人である内府は東対前面の庭上にて二拝、その後主人はひとりで南階を経て東対南面へと至り、これに内府が続く。大納言以下は東中門廊より対へと至る。これを図示したものが図-1の中の②である。すなわちここに見られる動線は、やはり外部空間を経由することにはかわりなく、その途上における視界が常に開放されていたことは、先に見た大饗の場合と同様である。

このように“大臣大饗”や“臨時客”の場合には、必ず庭園をも含めた形で儀式が進行し、主要建物が寢殿と対とのちがいがいこそあれ、そこに至る動線は常に視界の開かれた外部空間を経由することがわかる。

図—4 平城京左京三條四坊七坪遺構²³⁾

図—5 平安京右京一条三坊九町遺構²¹⁾

一条三坊九町遺跡の建物配置プランであるが、ここでも同様の施設を認めることはできない。従って宅地内に正殿と脇殿が点在するという住宅形式の確立よりも、廊や渡殿の成立はさらにおくれていることがわかる。寝殿造住宅における中門廊や渡殿は、これらの点に在する建物を互いに連結するための施設として発生したと考えられるが、正殿や脇殿の発展形態としてとらえられる寝殿及び対が儀式的中心的建物としての性格をもつのに比して、これらの連結施設は従属的であり、しかも発生過程が遅れるが故に、その建物構造も未熟であった。東三條殿では、中門廊や渡殿が儀式に際して着席場所として利用される場合はあるが、図—1に示す如く、渡殿は葺のような非常に開放的な建具構造をもっているし、中門廊、透渡殿に至っては吹きはなし構造である(写真—2)。すなわちこれらの連結施設は、人間の視界を完全に閉鎖してしまう建物構造をもっておらず、この動線上から人間の視界が庭園景観や園外の自然景観へと及ぶ可能性は充分にあったと考えられる。

また、乗物についてはどうか。まず御輿についてであるが、これは「鳳輦」「葱花輦」以下いくつか

写真—3 鳳輦 (年中行事絵巻)

写真—4 前駆の殿上人と関白の車 (年中行事絵巻第15巻)

写真—5 暴走する牛車 (年中行事絵巻)

の種類があり、基本的に五位以上の人間が使用するものである。写真—3は『年中行事絵巻』第1巻第4段にみられるもので、その構造は人間が肩にかつぐ形式で、四本柱の三方に御帳を垂らし、進行方向に向って常に視界が開けるものであることがわかる。これに対して車とは「輦車」「檳榔毛車」をはじめ車輪のついたもので、人間及び牛がこれを牽く²²⁾。この場合は乗降口に御簾が下ろされるが、これも常時おろされているものではない。『年中行事絵巻』第15巻には路上をいく牛車が描かれているが、御簾を上げているのがわかるし(写真—4, 5),

『枕草子』第302段には、明け方の月に照らされる路傍の冬景色を車中よりながめている情景描写がある。

「白銀などを葺きたるやうなるに、水晶の瀧などいはましやうにて、長く、短く、ことさらにかけわたしたると見えて、いふにもあまりめでたきに、下簾もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれば、奥までさし入るたる月に、薄色、白き、紅梅など、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる、つやなど月にはえて、をかしう見ゆる……（以下略）」²³⁾

このように、中門、渡殿の建物構造や、御輿、牛車等の乗物が、非常に開放的な性格をもっていることが指摘され、従って、動線が外部空間を経由しない場合でも、視界は常に開かれていく可能性をもっていたのである。このような動線上では、邸宅外の路上から寝殿に至るまで、自然景観の眺望行為が休みなくくりかえされる可能性を常に内包し、風景は切れ目なく連続して人間の視界に映じることになる。

以上にみるごとく、寝殿造住宅における儀式は基本的に建物だけで完結せず、庭園の一部（南庭）をも含めた形で進行し、動線が一旦外部空間に導かれるが故に、その動線上の人間の視界はたえず開放されていたといえる。たとえ終始建物を經由する場合でさえ、建物間の連結施設の内部構造及び建具の開放的性格によって、その動線上の視界は常に開放的であり得た。そして乗物も完全な視界の閉鎖を保証するものではなく、路上においてもたえず車外の自然景観を望むことが可能であり、このような自然景観の眺望行為の可能性は、動線の全行程において内包されていたといえるだろう。

2. 庭 園

この節では、文献上眺望行為が行われたことを知り得る庭園として、主として臥見亭、伏見殿、水無瀬殿の3例をとりあげ、庭園と園外景観に関する考察を行う。

臥見亭と伏見殿とは、造営年代におよそ150年の開きがあり、両者は同一の位置に存在するものではなかったのかもしれないが、その伝領の過程から考えれば、現在の伏見山一帯のほぼ近い位置に存在していたものと考えられる。臥見亭は、11世紀後半、藤原頼通の子である橘俊綱によって造営された別業で、『中右記』の「今日辰時許。修理大夫俊綱朝臣臥見亭已以焼亡。件處風流勝他水石幽奇也。悉為煨燼。誠惜哉」²⁴⁾の記事が示す如く、寛治7(1093)年12月24日焼亡したらしい。俊綱が、白河上皇の造営になる鳥羽殿を退けてまで、この臥見亭を当時の3大名園の1つに列挙したという説話はよく知られるところである。

「白河の院『一のおもしろき所はいづこかある』と問はせ給ひければ、『一には石田こそ侍れ』『次には』と仰せられければ、『高陽の院ぞ候ふらむ』と申すに、

『第三には鳥羽ありなむや』と仰せられければ、『鳥羽殿は君のかくしなさせ給ひたればこそ侍れ。地形眺望などいとなき所なり。第三には俊綱が伏見などや候ふらむ』とぞ申されける。殊人ならば、いと申しにくきことなりかし。高陽の院にはあらで、平等院と申す人もあり。伏見には山道を造りて、然るべき折節には、旅人を仕立てて通されければ、さる面白き事なりけり」(『今鏡』藤波の上、第四)²⁵⁾

彼の弁によれば、「地形眺望などいとなき」庭園は興をそそられないとして、臥見亭を鳥羽殿にかわるものとして推挙したというのであるが、実際に臥見亭からどの程度の眺望が可能であったのか、文献上知ることはできない。これ以外に臥見亭庭園に関連する描写は、『今鏡』の中に次のような記述を認めるのみである。

「……修理大夫立ち出でて、かへり参りて『あるじして聞こし召さすべきやう侍らざなり。御臺などの新らしきも、かく御覧ずる山のあなたの倉に置きこめて侍れば、便なくといひづべきやう侍らず。あらはに侍るは、皆人の用ゐたる』よし申しければ、『何の憚りかあらむ。ただ取出だせ』と仰せられければ、『さば』とて立ち出でて取り出させけるに、いろいろの狩装束したる伏見侍十人、いろいろの袍に、いひしらぬ染めまぜしたる帷子、くゝり、かけとち、などしたる雑仕、十人ひき連れて、倉の鍵持ちたる男、先に立ちてわたるほど、雪にはえて、わざとかねてしたるやうなりけり。先に跡ふみつけたるを、しりにつづきたる男女、同じあとを踏みて行きけり。かへさには、御臺、高杯白銀の銚子など、一つづつささげて、鍵もちたるは、この度は、しりに立ちて帰りぬ。かゝるほどに、上達部、殿上人、蔵人所の家司、職事、御隨身など、さまざまに参りこみたりけるに、このさかのさ、所々にいひしらぬ供へども目もあやなりけり。師信『いかにかくは俄かにせられ侍るぞ。かねて夢など見侍りけるか』など戯ぶれ申しければ、俊綱の君は『いかでかゝる山里に、かやうのこと侍らむ用意なくては侍るべき』などぞ申されける。」(『今鏡』同上)²⁶⁾

これは、俊綱が臥見亭をあまりに自慢するので、関白師実が、雪の降り積もった朝に、突然臥見亭を訪問したときの記事である。不意の訪問に際しても、俊綱は、庭上を華麗な装束の侍や雑仕に行列させて、宴の準備の過程をみごとに演出して見せ、師実以下の訪問客を非常に感嘆させたという。

この2つの引用文からは臥人亭からどのような眺望景観が展開したのかを知る由もないが、両者を比較するとある一つの共通点にきづく。それは、庭園内を行き来する人間の運動が記述の中心に据えられているということである。前者の場合には、庭園内につくられた山道を行く旅人の姿であり、後者の場合は倉までの苑路を往復す

る侍や雑仕の姿である。つまり『今鏡』の筆者が、臥見亭の特徴としてあげたのは、園外景観の眺望のすばらしさではなく、庭中を旅人の装束をさせた人間を歩かせてその行為を楽しんだということであり、関白師実一行が第一に感動したのは、庭上においてくりひろげられた侍や雑仕のはなやかな行列だったのである。このことは、臥見亭の庭園の特徴が、庭園をうつわとした人間の運動を鑑賞することにあつたのであり、眺望景観をも含めた庭園景観構成は二次的なものとしてとらえられていたということを暗に示している。いいかえるならば、庭園や園外の眺望景観は、そこでくりひろげられる旅人や侍、雑仕などの人間の運動に従属して、それに彩りをそえる背景としての効果をもつものであつたといえよう。

このような特徴は、臥見亭だけに限らず、他の寝殿造住宅庭園一般についてあてはまる。たとえば、『栄花物語』の土御門殿に関する記述が、それを示している。

「殿の有様目も遙かにおもしろし。山の紅葉数を盡し、中島の松に懸れる鶯の色を見れば、紅、蘇芳の濃き薄き、青う黄なるなど、さまざまの色のつやめきたる裂帛などを作りたるやうに見ゆるぞ、よにめでたき。池の上に同じ色々さまざまのもみぢの錦うつりて、水のけざやかに見えていみじうめでたきに、色々の錦の中より立ち出でたる船の楽聞くに、そぞろ寒くおもしろし。すべて口もきかねばえ書きも続けずよろづの事し盡させ給へり。中宮西の対におはしまして、院は寝殿におはしまして、上も東の南面におはします。とのゝ上は東の対におはしまして、上達部などは渡殿に着き給へり。諸大夫、殿上人などは幄に着きたり。院の女房寝殿の西南の渡殿に候ふ。御簾の際などいみじうめでたし。ことゝも果てゝ、行幸還らせ給」(『栄花物語』とりべ野)²⁷⁾

これは、長保3(1001)年10月に行われた東三條女院(藤原詮子)の40歳の御賀に関する記事であるが、寝殿に女院と一条天皇、西対に中宮彰子、東対に鷹司殿倫子、その他の上達部、殿上人はそれぞれ渡殿や幄に着座して庭園では船が浮べられて、はなやかな宴遊が進行していることが描写されている。みられるように、庭園が宴遊のためのうつわとして機能し、紅葉する樹林や、池の中島の風情等の庭園景観がそれを彩り、盛り上げる背景的效果をもっていることがわかる。管見の及ぶ範囲では、園外の眺望景観に関する記述が認められないため、土御門殿における眺望行為は不可能であつたものと考えられるが、庭園の使用のされ方が、臥見亭の場合と同様であることがわかる。また『作庭記』には、「南庭ををく事は階隠の外のはしらより、池の汀にいたるまで六七丈、若内裏儀式ならば八九丈にもをよふへし」²⁸⁾とあって、庭園の一部は予め儀式空間として準備されるものであつた。すなわち寝殿造住宅では、庭園が人事のためのうつ

わとして機能し、もしそこから園外景観を望むことがあつたとしても、それは庭園景観と同様に、人事を盛り上げるための背景的效果以外の機能をもたなかつたのである。

さて、臥見亭焼亡の後、伏見庄は俊綱からその子の家綱へと伝えられ、白河院、有仁親王、守子内親王、頌子内親王を経て、後白河院に献上され、後白河院はここに伏見殿を造営して、それ以後仙洞となつた。この後、伏見殿は一時六條殿及び長講堂領となるが、やがて後嵯峨院から後深草院に伝領された²⁹⁾。この時期の伏見殿の構えは相当立派であつたらしく、『増鏡』には次のように記す。

「御花はつれば、両院ひとつ御車にて、伏見殿へ御幸なり。秋山の気色御覧ぜさせんとなりけり。上達部、殿上人、かなたこなた押し合はせて、色々の狩衣姿、菊紅葉こき交せてうちむれたる、見どころ多かるべし。野山のけしき色づきわたるに、伏見山、田の面にづく宇治の川浪、はるばると見渡されたるほど、いと艶あるを、若き人びとなど、身にしむばかり思へり。」(『増鏡』第十老のなみ)³⁰⁾

この記事は、弘安2(1279)年9月³¹⁾、供花の法会の後後嵯峨院と御深草院が伏見殿に行幸したときのものである。文中から、伏見殿における眺望景観の概要を知ることとはできるが、庭園景観に関する明確な記述がないため眺望景観と庭園景観とが対応関係にあるのか、それとも庭園の境界に位置したときには、はじめて園外景観がのぞまれるといった両者が全く別のものとしてとりあつかわれているのかが判然としない。もし前者であるとするなら、上記の文意は、伏見殿の存在する伏見山から麓の水田、宇治川へと、風景が近景から遠景へと次第に連続して展開していく過程を示していると考えられ、庭園と庭園外との境界が不分明で、庭園景観と園外景観とは半連続的につながつたものとして理解されていたといえる。この場合、自然が庭園としてとりこまれ、両者が混然一体としていたことが想像される。また後者であるとするなら、園外景観の眺望行為は、庭園景観を鑑賞するということとは全くきり離された行為として位置づけられていたといえるだろう。

これらの眺望行為の特性は、水無瀬殿においても同様に認めることができる。

「鳥羽殿、白川殿なども修理せさせ給て、つねに渡り住ませ給へど、猶又水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひかして、遊びをのみぞし給。所がらも、はるばると川にのぞめる眺望、いとおもしろくなむ。元久の比、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕は秋となに思ひ

けむ

かやぶきの廊、渡殿など、はるばると艶におかしうさせ給へり。御前の山より瀧落とされたる石のたゝずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる比、人々あまた召して、御遊びなどありける後、定家の中納言、いまだ下腐なりし時、たてまつられける。

ありへけむもとの千年にふりもせて我君ちぎる千代の若松

君が代にせきいるゝ庭を行水の岩こす数は千世も見えけり」(『増鏡』おどろのした)³⁶⁾

水無瀬殿は、正治2(1200)年頃、後鳥羽天皇によって造営された離宮で、上記の引用文の「廊、渡殿」などの語句が示すように寝殿造の形式を持ち、「はるばると川にのぞめる」眺望絶佳の地に立地していたことがわかる。『高野日記』には、「尾上殿、滝殿、田上のいなば殿、かはにのぞめるかやぶきのわた殿、釣殿、所々の岩木の色あひ、水のこゝろばへ、そのおりおりのけしきをかきわけられし」³⁷⁾とあって、寝殿造であったことを証明しているし、また、定家の作になる「ありへけむ…」以下の2首は『拾遺愚草』に「水無瀬殿にあたらしく滝をおとされ、いしたてられて後まゐりて、あしたに清範の朝臣のもとへ、地形勝絶の由申しゝ中に」³⁸⁾と詞書して記録されていることから、地形や眺望のすぐれていたことがわかる。

この水無瀬殿は、『百鍊抄』建保5(1217)年正月10日条に「上皇御移徙水無瀬殿新御所、是本御所去年大風洪水之時、顛倒流失之間、更点他所、所被造営也」³⁹⁾とあって、洪水によって流失し、移転再建されるに至ったらしい。上記の引用文はすべて再建以前の水無瀬殿に関するものである。

さて、これらの引用文の中でも、とりわけ『増鏡』の「見わたせば山もとかすむ水無瀬川」「せきいる庭」や、『高野日記』の「かはにのぞめるかやぶきのわた殿、釣殿……」等の記述に注意したい。これらの文章から総合的に判断すると、水無瀬殿は自然の河川に臨んで構えられた寝殿造住宅で、そこからは川や対岸の山が眺望されたことがわかる。しかもこの眺望景観は、『増鏡』の「御前の山より瀧落とされたる石のたゝずまひ」の記述が示す如く、庭園景観と同一方向にのぞむことが可能であったと推定される。それ故、水無瀬殿は、自然の一部が庭園の一部にとりこまれた形態をもち、両者の景観が連続的であったといえるだろう。すなわち、先に述べた臥見亭、伏見殿の場合と同様であることが首肯できる。

上述の特徴は、庭園の形態上の問題であるが、質的な面においても自然との隔差は不分明である。それを示すものとして、眺望行為が行われた事例と関連するものではないが、小野宮殿の庭園意匠をあげることができる。

「御前の池よりあなたをはるばると野につくらせたまひて、時々花、紅葉を植ゑたまへり」(『大鏡』太政大臣実頼)³⁶⁾

池よりむこうがわを四季の草花や紅葉樹木を植栽して一面に野原のように造作したということは、自然のあるがままの姿をそのまま建物の前面に縮模再現したということであり、自然風景の即物的な移築が作庭意識の根底にあることを示している。このことは、園池が海洋風景の縮景を意図して構築されていたことから容易に理解することができる。たとえば、『十訓抄』の「七条の南室町の東一町は祭主三位輔親が家也。丹後の天橋立をまねびて、池の中島を遙にさし出して小松を長くうへなどしたり」³⁷⁾の記事や、『作庭記』の「大海様は先あらひそのありさまを、たつへきなり」³⁸⁾の記事、あるいは、『本朝文粹』の中の河原院に関する詩歌中に「岸勢縮海」³⁹⁾なる語句を見いだすことができる。

また、これらの同様の意識を示すものが前栽合、前栽堀である。前栽合とは、左右に組分けをして、自然景観を模して植込みをつくることを鏡うあそびで、次のような事例がある。

「御壺わかせ給て、前栽合せありしにも、をかしくめづらしき事ども多かりき。なにかしの朝臣の、櫓の島の気色を造りて侍りけるを、平大納言経親、いまだ下腐にて、兵衛佐などいひけるほどにや、その宇治川の橋を盗みて、我つくろひたるかたに渡して侍ける、いと恐ろしく心かしこくぞ侍ける。」(『増鏡』老のなみ)⁴⁰⁾

前栽堀も同様のもので、山野に自生する草木を庭園に移植する行為をさす。『小右記』寛弘9(1012)年9月6日条には、「今日雲上人々、向嵯峨野、堀前栽可殖皇太后宮之由(下略)」⁴¹⁾とあるし、また『藤原元真集』には「御前の前栽はるとて」「人のもとにをみなへし植て」「女郎花のはなもてきて人のうふるに」⁴²⁾と題する和歌が見うけられる。

このように、寝殿造住宅庭園は、形態的に自然と連続していることを想像させるだけでなく、自然風物の即物的移築、再配置を作庭意識の根底にすえていることから両者の質的な隔差も認められないのである。それ故、たとえ、このような庭園から、庭園景観と同一方向に園外景観の眺望行為が行われたとしても、両者は同質のものといふとみなされ、後者は前者の延長上に連続して位置するものとしてとらえられていたと考えられる。

以上のように、臥見亭、伏見殿、水無瀬殿の庭園及び園外景観に関する情景描写と、他の寝殿造住宅の庭園描写とから、①庭園がその中を運動する人間のうつわとして機能し、この運動そのものを鑑賞することが庭園の使用目的の最重点にすえられていること、②庭園と自然との境界が不分明で、両者は形態的に連続したものとして

理解されていた可能性があること、③庭園の細部デザインが自然風物の即物的移築を基本としているため、庭園と自然とは質的に差異のないものとして意識されていた可能性があること、の3点が導き出される。そして、このような3つの庭園カテゴリーの特性の故に、眺望景観は庭園景観の延長上に連続して位置するものとして理解され、両者はともに庭上で行われる人事の背景的效果としての機能をもつことになったわけである。

3. 自然

ここでは、自然に対応するところの都市の景観的、社会経済的性格を概観し、美術作品から読みとれる彼らの自然観をも傍証としつつ、庭園文化の担い手であった貴族階級の自然カテゴリーに対する認識の程度について考察してみたい。

遷都間もない頃の平安京の景観を詠った『催馬楽』によると、当時の平安京は人間の集住地としての都市の景観をもっと同時に、豊富な農村、自然景観をも内在させており、都城景観は明らかに二面性をもっていたことがわかる⁴³⁾。『類聚三代格』によると、天長5(828)年頃には、町数は580余町と京内の約半分を占める⁴⁴⁾のみで当初からすでに空地として放置された箇所が多かったものと想像される。京内に居住する農民は、京周辺から遠国に至る広範囲にわたって口分田を班給されていたが、このような空地では、次第に京中農民による水田耕作が行われるようになり、『続日本後紀』巻7、承和5(838)年7月1日条には、湿地における水生植物の栽培以外の京中水田耕作の禁止を定め⁴⁵⁾、『延喜式』巻42には、水生植物の栽培に際しても、溝の拡張に伴う道路面の縮小を厳しく戒めている⁴⁶⁾。しかし、このような耕作はあとをたたず、結局『類聚三代格』昌泰4(901)年4月5日条の、鴨河堤における耕作を許可する太政官符にみられるとおり、京内景観の荒廃化を防ぐ意味からかえて励行されるまでに至った⁴⁷⁾。

10世紀末の景観を伝える慶滋保胤の『池亭記』によれば、低湿地であった右京の衰退に伴い、人口が左京に集中し⁴⁸⁾、『扶桑略記』巻30には、応徳3(1086)年、検非違使を派遣して右京の水田三百余の稲を刈らせ、牛馬の飼にしたとある⁴⁹⁾。また、永久3(1115)年3月には針小路以北の地が“巷所”となったことが知られる⁵⁰⁾。

“巷所”とは、もともと平安京造営に際して道路や宅地として造成された部分が耕地化されたもので、12世紀に至っても遷都時と同様に人家の密集する都市景観内部に、豊富な田園景観が内在されていたことを裏づけている。

しかしながら、こうした一面を持ちつつも、10世紀から13世紀にかけて、左京地区に人家が集中したことをはじめ、内裏の里内裏化や、院政の開始に伴う白河地域へ

の都市化の波及など、平安京は遷都当初の形態から大きく変容していったことも事実である。9世紀から10世紀初めまでの火災記録は比較的少なく、官衙や貴族住宅に限られているのに対し、10世紀後半以降は、いわゆる“小屋”と記載のある火災が頻発し、安元3(1177)、治承2(1178)年の火災では、左京城の大半が焼失するに至った⁵¹⁾。この“小屋”は、即庶民の住宅と結びつくものではないが、『明月記』嘉禎1(1234)年3月15日条に示す如く、いわゆる“如法一町家”と呼称される大規模な寝殿造住宅が徐々に少なくなっている事実⁵²⁾ともあわせて、左京における細分化された土地区画と、集住形態とを示すものであろう。

このような集住地帯は、もともと律令官衙に派生した手工業者集団によって形成されたものであった。すなわち、遷都当初、諸国から租税として送進されてくる物資の官庫として、また、調庸物やその他の交易物を加工する官営工房として、内裏周辺に形成された、いわゆる諸司厨町が、摂関政治によって権門勢家の私的工房へとその性格を変え、これに伴って諸司厨町の周囲には、これに付属する形で手工業者集団の集住地が形成されていった。平安京には官市としての東西市が存在したが、西市は早くからすたれ、東市以外にも、これらの家産工房では権勢家からの受注生産を行う以外に、かなり自由な商品生産を行っていたらしい⁵³⁾。最初これらの手工業者集団は町筋に存在したが、やがて東西大路との交差点、すなわち四条町、七条町付近が商業地として繁栄し、独立して店舗を構えるものも出現した⁵³⁾。このような手工業者集団の一定の独立は、耕作から離れたところの生産を営む都市民の発生を意味するが、しかし一方では、生産手段が最終的に権勢家に帰属するという点で、まだまだ厳密な意味での自由な都市民とはなり得なかったし⁵⁴⁾、彼らが広域にわたって商品経済をくりひろげるといったこともおこり得なかった。

これに対して農村でも、都市と離れたところで一定の変動をみせた。律令体制は、国家的土地所有のもとに、個別の共同体成員に編戸を通じて人別賦課を行い、地方行政の末端に至るまで、その階級的支配法則を貫徹していた。もともと律令体制下における国、郡、里(郷)などの地方行政組織の長たる者は、その内の有力農民が選ばれるのを常としたが、彼らは伝統的共同体の首長として、国家的土地所有を通じて共同体成員を個人身体的に直接支配していた⁵⁵⁾。ところが9世紀頃には国家の支配力も次第に弱体化し、有力農民が口分田を長期間にわたって占有するという事態が頻発し、加えて有力寺社による荘園開墾も手伝って、10世紀には正常な口分田班給が行い得ないばかりか、租税田は地子田化していった。これに呼応して行政組織の変質も免れず、旧来の共同体首長として政治権力と私財をほしいままにした郡司層は没

落し、かわって国衙の規模のもとに国司に支配権が集中するようになり、やがて彼らは在庁官人として在地領主化していった⁵⁶⁾。10～11世紀の地方は、古代共同体の解体とともに、国司層をはじめとする新しい中世的在地領主支配が展開していく過程としてとらえられる。11世紀から12世紀には、これらの在地領主は中央の権門貴族に次々と所領を寄進し、ここに寄進地系荘園が成立する。中央権政家は、旧来の平安京に定住したまま荘園領主へと転化したのであり⁵⁷⁾、一方、荘園の荘官から出発した在地領主は、やがて封建領主へと成長していく。

このように10～12世紀においては、中央では耕作から遊離したところの生業を営む一定の都市民が発生し、地方では小規模のヒエラルヒーの再生産をくりかえしていくという、8～9世紀には見られなかった都市と農村の各々の社会、経済的発展がみうけられる。そして、権力の頂点にたつ中央の権勢家たちは、これらの次の時代への胎動を統制的に把握する力を次第に喪失し、やがて極楽浄土への志向を強め、寺院の大規模な造営に明け暮れるようになっていった。

以上、かなりの素描ではあるが、9～12世紀の都市をとりまく状況を、景観的側面と社会、経済的側面とから概観した。このうち、とりわけ当時の都市に関する変化の特徴をあげるならば、その内部にかこつきではあるが、耕作を生業としない手工業者集団という一定の都市民を生成したということに凝縮されている。すなわち、それは景観的には耕作地を伴わない都市景観の発展を促進したし、また社会、経済的には都市と農村の社会的分業の萌芽を意味し、都市が農村ではない存在として自立しはじめたことをあらわすものといえよう。そういう意味では、8世紀の平城京ないしは9世紀の遷都間もない頃の平安京が、景観的にも都市の景観を呈すると同時に豊富な田園景観をも内包し、社会、経済的にも王侯の宿

营地であり、豊村の副受胎的産物としての性格を持っているのに比して、前進してはいる。しかしながら、先にも述べたように、12世紀に至っても都市内に農村、田園景観が内在されていたことは事実であるし、また分業的側面からみた都市と農村の分離は想定し得ても⁵⁸⁾、広域にわたる商品経済の媒介によって、前者が後者を明確に収奪するといった明らかな対立関係を呈していないことも事実である。この時期の都市における変化と、農村における階級闘争の展開とは、ある一定の乖離現象を呈しつつ同時進行していくのである。それ故、都市と農村の景観的相異は一線を画するほど明瞭なものではなかったし、同時に“農村との一種の差別なき一体性”という古代アジア都市の社会、経済的性⁵⁹⁾、まだまだ克服しきれてはなかったといえる。

このような状況下で、都市貴族はヒエラルヒーの頂点に位置し、先進的文化の担い手であったにもかかわらず荘園経済の実質的な掌握者たり得ず、都市カテゴリーと、それ以外の農村をも含めた自然カテゴリーを実体的に認識し、しかも両者の統一的把握を志向するという階級意識を持ち得るはずもなかった。実質的な政治、経済社会的胎動から遊離した都市貴族にとっては、極楽浄土の世界以外に自らの道を見いだすことはできなかったのである。彼らの日常生活は儀式と宴遊に明け暮れ、自然の風物はそれらを演出する単なる道具でしかなかった。ここで彼らの自然カテゴリーに対する認識の程度を補足分析するために、彼らの自然観を、主として絵画作品を通して検討してみよう。

当時の貴族たちの生活を描写した美術作品の中に数多くの絵巻物があるが、それらの大半は12～13世紀に製作されたものである。絵巻物に見る自然のとりあつかい方を一口でいうと、独立した自然はなく、すべて人間生活を彩る点景として、人事の背景的效果をたかめるものと

写真—6 源氏物語絵巻「御法」(五島美術館蔵)

して描かれているといえる⁶⁰⁾。これは、登場人物の行動を中心とした人間生活の有様を描くという絵巻物の絵画的性格にも起因していると考えられるが、製作年代及び物語の題材の年代における自然観の一端をもうかがい知ることができるものである。

絵巻物では、自然に関する事物は、登場人物の動作を中心に四季の草木が穏やかに、かつ登場人物の心情に密着した風情で描かれている。たとえば、『源氏物語、御法』では、源氏が臨終の紫の上を見舞うシーンが描かれているが、画面右の源氏と紫の上の永久の別離の心情を物語るかのように、庭先の女郎花が風になびいて一層哀恨の念をかきたてる。人物に比してあまりに不均衡に描かれた大きな女郎花は、身の辺のどこにでも存在する自然風物そのものである(写真-6)。また、『北野天神縁起絵巻、第3巻、第3段』は、菅原道真が筑紫の配所に赴く直前に庭先に咲きほころ紅梅との別離を惜んでいる有名な情景である。ここでも道具が少なく描かれているのに対し、紅梅が一段大きくとりあつかわれていて、左遷のあわれな模様をもちたてている(写真-7)。しかしこれらの描写の主題は、あくまで源氏や紫の上のかなしみの心であり、道真の淋しい心情である。女郎花や紅梅はそれを盛り上げるための背景的存在なのである。

また、『信貴山縁起絵巻』では、紫雲たなびく生駒、信貴の山中の穏やかな自然景観がおおらかに描かれているが、これも主人公の尼の道中の一つの景観にすぎない。物語の主題は尼の行動であり、信貴、生駒の自然景観はその背景にすぎないのである。

このように絵巻物では、身のまわりのどこにでも存在するごく自然の風物が、季節感を表現する素材として、また画面の劇的効果を盛り上げるための手段として描かれている。つまり描かれている自然は、それぞれの絵巻の主題としての人間の行為に従属して、あくまで人間生活を彩るための背景として描かれているといえるだろう。しかも、『信貴山縁起絵巻』は特例としても、他の大半が自然を植物などの風物として単体的にあつかい

それらの総合化された景観として把握しようとする意識が未熟であることも指摘しうる。これらの美術作品に見る自然のとりあつかい方＝自然観は、2で指摘した庭園の細部意匠にみられるそれと同質のものであることがわかる。そして、それは先述の如く、8～9世紀に比して成熟しつつあるとはいえ、平安京は未だ農村的な自然田園景観を内包しており、都市貴族たちの日常生活の周辺には、上記のような自然風物が豊富に存在していたことと不可分に結びついているのである。古代から中世へと各々独自の胎動を展開していく都市と農村を、統一的に掌握する意欲を喪失していった都市貴族にとっては、都市に対応する自然カテゴリーを総合的に認識することはもちろんのこと、自然の姿を抽象的認識の介在のもとに形象化するといった事も不可能だったのであり、個々ばらばらな風物としての自然を身近にひきよせて楽しむことしかできなかったのである。

結 論

以上、寝殿造住宅庭園における眺望行為について、建物、庭園、自然の3つのカテゴリー別に分析を行ってきたわけであるが、まとめてみると以下ようになる。

① 寝殿造住宅における儀式は、主として寝殿や対などを舞台としてくりひろげられるが、これらの中心建物に至る人間の動線は常に開放的であり、その途上において、人間の視界が庭園や園外の自然景観へと発展していく可能性を常にはらんでいた。その理由として、まず主要建物に至る動線が庭園をも含めた外部空間に存在し、しかもそれが徒歩で行われるということがあげられる。第二に、建物内部を経由する場合でも、主要建物間を連結する渡殿や中門廊が、非常に開放的な建物構造をもっていたことが指摘できる。一棟一室形式建物¹⁸⁾が点在する奈良時代住宅の発展過程として位置づけられる寝殿造住宅においては、これらの建物間の連結施設はまだ未熟であった。そして、主要建物間の往来を、庭園を徒歩によって經由することなくして実現するためには、未熟であるが故に開放的なこの連結施設を経由する以外に方法はなかったのである。第三に、外部空間を経由する際に乗物を使用する場合でも、そこからの車外眺望は常に可能であったことがあげられる。

このような動線上では、人間の視界は常に開放され、庭園景観をはじめ園外の自然景観へと視界が連続していく可能性は十分にあったといえる。すなわち、視界の隔絶された空間へと人間を導くことがないため、路上において眺望された一般的な自然景観は、ひきつづき邸宅内に入っても眺望されることになり、動線の頂点である寝殿や対に至るまでこの眺望行為はくり返し行われることになる。それ故、そこには、一般的景観を庭園及び建物などのある特定の地点における景観として止揚する、い

写真-7 北野天神縁起絵巻第3巻、第3段
(北野天満宮蔵)

いわゆる“風景の特殊化”の技法が認められないのである。

② 庭園カテゴリーの特性として、まず儀式が建物内部だけで完結することではなく、必ず庭園をも含めた形で進行していることと関連して、庭園が儀式や宴遊のためのうつわとして機能していることがあげられる。第二に庭園が自然と半ば連続した形態を持ち、しかも庭園のデザインが自然の姿を質的に昇華したものではないことが指摘できる。つまり、両者間の空間的側面からみた形態的、質的隔差が不分明で、自然カテゴリーの一部が建物の軒先にひきよせられて付帯している状況だといえるだろう。

それ故、そこから園外景観の眺望行為が行われたとしても、園外景観は庭園景観の延長上に連続して位置するものとして理解され、宴遊等の人事の背景的效果のような二次的機能しかもち得なかった。

③ 自然カテゴリーに対応する都市の特性は、8～9世紀に比して前進しているとはいえ、まだまだ未熟で、逆に都市に対する自然カテゴリーの相対的な認識度を飛躍的に発展させるには至らない。景観的にも、集住が進み都市的景観を呈するようにはなるが、未だ農村的田園景観も内在されていたし、社会、経済的にも、農耕を生業としない一定の都市民が発生したが、最終的に生産手段を所有せず、都市共同体のもとに広域にわたって農村と商品経済を展開するまでには至らなかった。また、農村では都市とは離れたところで荘園経済が進行し、この中で中世的な在地領主支配が形成されつつあった。

このような都市と農村の動勢に対し、名目上の荘園領主たる中央都市貴族は、両者を統一的に掌握する意欲を次第に喪失していった。そんな彼らにとっては、都市ではない自然をカテゴリーとして概念的にとらえる能力をもち得るはずもなく、日常生活を彩るための個々の風物のよせあつめとしてしか認識し得なかった。

以上の3点から、建物、庭園、自然の3カテゴリーとも形態的、質的独立性を完成させていないことが指摘され、従って三者の関係性もきわめて錯雑した様相を呈することになる。

元来、内部空間は就寝のための空間として出発したものであり、それ以外の昼間の生活は屋外で行われていた⁶¹⁾。それが寝殿造住宅では就寝空間は“スリゴメ”に限定され、その他の内部空間は昼夜の生活空間として利用されるようになった(図-1)。しかしながら一方では、大規模な儀式や宴遊では、やはり屋外をも利用せざるを得ず、庭園は建物にとって必要不可欠の存在でもあった。すなわち寝殿造住宅における建物と庭園との関係は、外部空間における生活行為が内部空間にとりこまれていく過程としてとらえられる反面、両者が生活に際して常に一体的使用が計られるという点で、きわめて即自

図-6 3カテゴリー概念図

的なものであった。

また、同時に庭園は自然の延長部分として建物前面に付帯したものとして理解される。建物に位置する人間が生活を彩る道具として、自然を即物的に軒先にひきよせたものであった。

それ故、寝殿造住宅における3カテゴリーの関係性を庭園カテゴリーの側からみるならば、生活機能の媒介のもとに、建物カテゴリーと自然カテゴリーの延長部分として、両者の相互貫入によって生成されたものだといえるであろう(図-6)。

このような状況下で、建物に位置する視点から、庭園をこえて園外の自然景観を望むといった行為が行われたとしても、風景の特殊化が行われなければいけりか、園外景観は庭園景観の延長上に連続的に位置するものとして理解され、庭上で行われる儀式や宴遊等の人事の背景のような二次的機能しかもち得なかったのである。すなわちこの時期における眺望行為の特性は、前時代のそれ⁶²⁾と基本的に変わらないものであったといえよう。

註及び引用文献

- 1) 本中 真: 平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園、慈光院庭園、依水園庭園における眺望行為——形態論的相異の因果性: 造園雑誌46(5), 25—30, 1983
- 2) 川本重雄: 東三條殿と儀式: 日本建築学会論文集286, 147—153, 1978
- 3) 太田静六: 東三條殿の研究: 日本建築学会論文集218—17, 1941
- 4) 日本建築学会: 日本建築史図集: 44, 彰国社, 1955
- 5) 倉林正次: 饗宴の研究(儀礼編): 447—449, 桜楓社, 1965
- 6) 江家次第: 日本古典全集, 97—101, 日本古典全集

- 刊行会, 1931
- 7) 山塊記：史料大成26, 100—102, 臨川書店, 1965
 - 8) 江家次第：日本古典全集, 112—113, 日本古典全集刊行会, 1931
 - 9) 類聚雜要抄：群書類従469, 513—531, 群書類従完成会, 1929
 - 10) 口言部類：統群書類従250, 195, 統群書類従完成会 1926
 - 11) 川本重雄：寝殿造の典型像とその成立をめぐって(下)：日本建築学会論文報告集323, 1983によれば, 東三條殿は西対を欠いているため, 大饗と臨時客とで礼の方向が異なるが, 一般的にはどちらか一方に偏している。
 - 12) 中右記：史料大成9, 16, 臨川書店, 1965
 - 13) 中右記：史料大成9, 73—74, 臨川書店, 1965
 - 14) 栄花物語：日本古典文学大系76, 158, 岩波書店, 1965
 - 15) 御堂閨白記：大日本古記録, 180, 岩波書店, 1954
 - 16) 枕草子：日本古典文学大系19, 48—49, 岩波書店, 1958
 - 17) 世俗浅深秘抄：群書類従469, 457, 群書類従完成会 1929
 - 18) 井上充夫：日本建築の空間：57, 鹿島研究所出版会 1969
 - 19) 奈良市教育委員会：奈良市埋蔵文化財報告書, 45, 1980
 - 20) 奈良国立文化財研究所：平城京左京三条四坊七坪発掘調査概報：16, 奈文研, 1979
 - 21) 京都府教育委員会：埋蔵文化財発掘調査概報1981—1, 237, 1981
 - 22) 江馬 務：続有職故実：49—70, 文献書院, 1933
 - 23) 枕草子：日本古典文学大系19, 313, 岩波書店, 1958
 - 24) 中右記：史料大成9, 106, 臨川書店, 1965
 - 25) 今鏡：日本古典文学全書, 167, 朝日新聞社, 1950
 - 26) 今鏡：日本古典文学全書, 165—166, 朝日新聞社, 1950
 - 27) 栄花物語：日本古典文学大系75：225, 岩波書店, 1964
 - 28) 作庭記：日本思想大系23, 224, 岩波書店, 1973
 - 29) 八木国治：伏見御領の研究：国史叢説, 115—133, 1925
 - 30) 増鏡：日本古典文学大系87, 363, 岩波書店, 1965
 - 31) この年代については, 前後の文脈から弘安1(1278)年である可能性もある。
 - 32) 増鏡：日本古典文学大系87, 253—254, 岩波書店, 1965
 - 33) 高野日記：統群書類従523, 1248, 統群書類従完成会, 1924
 - 34) 拾遺愚草：統国歌大観(歌集), 158, 中文館書店, 1931
 - 35) 百鍊抄：国史大系, 150, 吉川弘文館, 1974
 - 36) 大鏡：日本古典文学全集20, 121—122, 小学館, 1974
 - 37) 十訓抄：国史大系15, 773, 経済雑誌社, 1901
 - 38) 作庭記：日本思想大系23, 226—227, 岩波書店, 1973
 - 39) 本朝文粹：日本古典文学大系69, 330—333, 岩波書店1964
 - 40) 増鏡：日本古典文学大系87, 362—363, 岩波書店, 1965
 - 41) 小右記：史料大成1, 294, 内外書籍, 1936
 - 42) 藤原元真集：群書類従248, 606—608, 群書類従完成会, 1930
 - 43) 催馬楽：日本古典文学大系3：389, 407, 岩波書店 1957
 - 44) 類聚三代格：国史大系25, 642—643, 吉川弘文館, 1965
 - 45) 続日本後記：国史大系3, 77, 吉川弘文館, 1966
 - 46) 延喜式：国史大系2—10, 921, 吉川弘文館, 1964
 - 47) 類聚三代格：国史大系25, 326, 吉川弘文館, 1965
 - 48) 池亭記：日本古典文学大系69, 417—418, 岩波書店 1964
 - 49) 扶桑略記：国史大系6, 836, 経済新聞社, 1898
 - 50) 東寺権上座定俊申状写：平安遺文5, 1643—1645, 東京堂, 1954
 - 51) 玉葉(二)：36—37, 東京活版, 1899
 - 52) 明月記(三)：453, 国書刊行会, 1900
 - 53) 井上満郎：都市の住人たち——日本生活文化史3：110—128, 河出書房新社, 1974
 - 54) 脇田晴子：日本中世都市の構造：日本史研究139・140, 15—36, 1974
 - 55) 坂本賞三：王朝国家体制：講座日本史2, 47—73, 1970
 - 56) 高田 実：国衙領と荘園——日本生活文化史3：2448, 河出書房新社, 1974
 - 57) 戸田芳実：王朝都市論の問題点：日本史研究139・140, 7—14, 1974
 - 58) 黒田紘一郎：日本中世における都市の問題——コメント1：日本史研究139・149, 36—41, 1974
 - 59) カール・マルクス：資本主義的生産に先行する諸形態：21, 国民文庫28, 1963
 - 60) 奥平秀雄：絵巻物——日本の美術2(66)：111—121至文堂, 1966
 - 61) 井上充夫：日本建築の空間：157, 鹿島研究所出版会, 1969
 - 62) 本中 真：平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園, 慈光

Summary : This study is concerned with views from the Shinden-zukuri residence. The specific characters of 3 categories, buildings, garden, nature, which compose the views lead to the consequences of the views as follows.

1. The buildings and the garden are united as a ceremonial space in the Shinden-zukuri residence. And the construction of the corridors; Roh and Watadono, which connect main buildings such as Shinden and Tai, are continually open to surrounding views. The visibilities during viewing activities of the ceremonies are, therefore, continually open. Distant natural views from the residential area are not considered to have been intently framed up from common scenery in Kyoto district.

2. Garden is constructed by means of the topographical condition and use of the natural things, and is, therefore, physically a part of the nature. The outward views are appreciated as the extension of the garden sceneries, and has only secondary function as to the ornamental background for the ceremonies held in the garden.

3. There happened the division between city and agricultural area in terms of both scenic and social economical aspects in 9~12 c. The ruling class couldnot recognize the differences of city and nature categories, and also couldnot realize to grasp them synthetically.

—— シンポジウムの案内 ——

（財）日本造園学会では（財）環境情報科学センターが主催する第10回シンポジウム「都市の環境診断」を後援致します。下記の要領で開催されますので会員諸氏の多数の参加を希望致します。

記

日 時：昭和58年12月10日（土） 13：30～17：00

場 所：飯田橋・家の光ビル（新宿区市ヶ谷船河原町11 TEL 260-4791）

会 費：会員 1,000円 非会員 2,000円

定 員：70名

プログラム

13：30 1) 主催者あいさつ

丸田 頼一（社・環境情報科学センター）

13：40 2) 都市の環境診断の目的と方法

日笠 端（東京理科大学工学部）

14：10 3) 都市交通と環境診断

依田 和夫（建設省都市局街路課）

14：40 4) 防災と環境診断

村上 處直（防災都市計画研究所）

15：10 5) 都市景観の環境診断

村田 守男（盛岡市都市開発部建築指導課）

15：40 6) 都市の環境診断の事例

林 泰義（計画技術研究所）

16：10 7) 質疑応答

17：00 終了